

かも 市史だより

平成27年10月
No.32

◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



▲ 拝殿の正面



▲ 幣・拝殿境



▲ 向拝及び正面出入口の虹梁

中大谷 諏訪神社拝殿の建築

中大谷の諏訪神社は本殿・幣殿・拝殿からなっています。本殿は平成十年（一九九八）、幣殿は大正十四年（一九二五）の再建ですが、拝殿の建立は明治十六年（一八八三）の「神社明細帳」に享和二年（一八〇二）とあり、江戸時代の様子を伝えています。

拝殿は入母屋造金属板葺で、向拝一間が付く平入の形を持ち、全体はよく均整がとれています。特に柱の高さと軒の出のバランスのよさがみとれます。現状、屋根は金属板葺となっていますが、軒は腕木の先に出桁を乗せたせがい軒で化粧柱を付けており、以前は茅葺であったことが知られます。

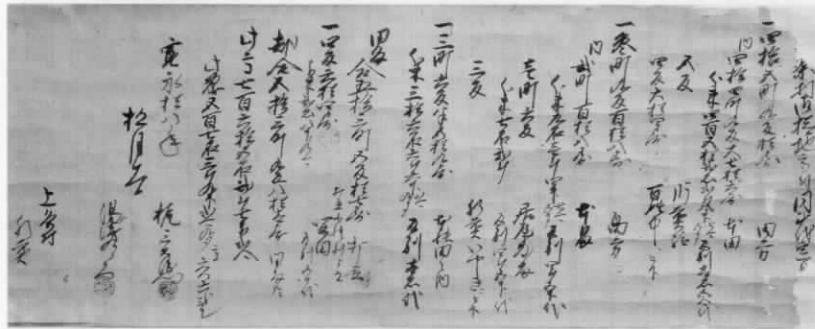
拝殿には向拝と正面出入口、それに幣・拝殿境の三か所に虹梁が設けられ、渦巻彫刻が施されています。渦巻の先端から延びる若葉の彫刻が場所により草花・波形・雲形と多彩で、力強さを表わしています。また、向拝の幕股は人の顔のようにもみえ、生々しく彫り込んであります。向拝上の手挟は波形で、躍動感にあふれています。工匠の心意気を感じられるこれらの表現は、上土倉の十二神社拝殿に通じるものがあり、関連性が窺えます。

新田開発の進展

江戸時代に入ると、七谷を除く市域の大半を治めた新発田藩は加茂川・信濃川といった河川の流路変更や築堤を進め、大規模な新田開発を行いました。その様子を紹介します。

加茂川沿いの開発

新発田藩は新田開発を積極的に推進しました。上条村では加茂川から



▲ 寛永18年(1641)の上条村高付目録(加茂市教育委員会所蔵 小柳家文書)

取水した灌漑用水によって開発が進められました。文禄四年(一五九五)の同村の石高は三八四石余でしたが、寛永十八年(一六四一)には七六五石余となり、五〇年たらずの間に約二倍に増加していて、開発が急速に進んでいます。

寛永八年(一六三一)八月、藩は加茂町の浅野三九郎に対して、大雨で難航が予想されるので加茂新田の堤防普請を翌年に延期することを指示しています。浅野は加茂組肝煎なので、この普請は藩が命じて加茂組の村々から人足を動員する大規模なものであったことがわかります。

この堤防がいつ完成したかは不明ですが、治水対策が進み開発が進んでいたと考えられます。普請が命じられて三〇年ほどたった寛文七年(一六六七)、加茂新田の石高は二六六石余で家数は九五軒となっています。

同じ時期に、加茂川の流路を変更する大がかりな工事も行われていま



▲ 加茂川・下条川河道模式図

固めやかさ上げ、水勢を弱める棒などを丈夫に作るように指示しています。この工事によって小吉島を囲む輪中堤ができると開発が進展しました。慶長三年の鶴森組の石高は二八三石余でしたが、慶安元年(一六四八)までに三五八石余が増加しています。

す。石田村は石川と隣接した集落で、慶安元年(一六四八)の絵図では加茂川左岸にみえています。しかし、この地名を継承した石田新田(田上町)は現在加茂川の右岸に立地しています。石田新田の北側には「古川」「古川端」の小字が残っています。近世初期の加茂川がこの付近で東へ蛇行していたのを直線状に流路が変えられたため、旧河道が「古川」と呼ばれるようになったと考えられます。この工事によって石田村が削られて、対岸(右岸)に石田新田が立てられたのです。

鶴森組の築堤と開発

慶長四年(一五九九)閏三月、新発田藩は小吉島(新潟市南区)の村々に対して鶴森組の東を流れる信濃川の堤防普請を命じました。堤防の根

は、永禄七年(一五六四)に小林氏ら八家が信濃国(長野県)から来て、開発したと伝えられています。初めは茨曾根村(新潟市南区)の枝村でしたが、慶長十五年に独立して北潟村となりました。元和七年(一六二一)の年貢高は一二石余の小村でしたが、正保四年(一六四七)には六四石と、二五年ほどの間に急増しています。家数も寛文七年(一六六七)には三二軒となり、八軒の草分けから始まった開発が一気に進展したことが窺えます。延宝八年(一六八〇)の検地帳では、同村の田がある場所には「かもしかた」「かたむかい」「かたはた」など、潟に関係する小字が多くみえます。低湿地の排水・干拓による開発が主であったことを物語っています。

(近世部会 池田 茂)

木漆工技能者の養成

木工試験場 募集案内

新海縣木工試驗場

電話 一三三三

- [illegible]

教育内容と

生徒の生活

生徒による製作実習



授業の合間には、野球の試合や遠足もあり、手製の卓球台を囲んで卓球を楽しむこともありました。

高校に準ずる

教育機関として

新潟県の高校進学率が五〇%を越えたのは、昭和三十五年のことでした。昭和二十年代から三十年代初頭頃にかけて、木工試験場のように学校ではない施設・機関での教育は、学習意欲のある勤労青年にとって大

▶ 寄宿生（右）と寄宿舎生活（昭

和三十年) 体育の時間や休み時間には、みんなで野球や卓球、バスケットボールなども楽しんだ

切な勉強の場となりました。農業県で実学志向の強い本県にあって、木工試験場の教育は、業界発展のためのみならず、多くの青年に高校に準ずる貴重な成長の機会を与えたと言えます。

(新潟経営大学 佐野 浩)



